

霧島国際音楽祭の誕生と成長

—産・官・民の地域イベントへの参加—

定藤 博子*

Abstract

Kirishima International Music Festival was founded under the name of “Kirishima International Music Festival/ Master courses” in 1980. There were 3 aims, rising the cultural level in Kagoshima, rising the educational level of Japanese artists and the tourism resources development of Kagoshima. Sharing these purposes, the people in Kagoshima, especially in Kirishima, support this festival, the foundation makes the programs and the local government offers the financial support. The inhabitants, the business and the government, these 3 elements certify the authenticity. This is why this festival has continued for 40 years.

1. はじめに

霧島国際音楽祭とは1980年にドイツ人ヴァイオリニストのゲルハルト・ボッセ氏による提唱によって始められた主にクラシック音楽の講習会とコンサートを中心とした音楽祭である。近年では、7月後半から約3週間にわたり、霧島市だけでなく、鹿児島県内の諸会場で開催される。

そもそも音楽祭とは行政・企業・市民が参加して成立する文化イベントである。よって、音楽祭は国の文化政策だけでなく、音楽祭が開かれる地域の歴史や特徴、そして社会的課題を反映する。そのため、音楽祭については、文化的側面だけでなく、社会学や教育学、そして経済学・経営学の分野で目下研究が進められている。

本稿では霧島国際音楽祭が地方音楽祭として長期的に存続している理由をその設立経緯から明らかにすることを試みた。図1に示したように、霧島国際音楽祭は、来場者数・開催日数・プログラム数、どれも増加してきた。下記で論じる通り、予算規模も初期の数百万円規模から1億円規模に成長した。同年に始まった草津夏期国際音楽アカデミー & フェスティバルと比べると、長期間にわたり多彩で数多くのプログラムを実施する。地域・自治体（行政）・企業がいかなる段階でいかなる施策をとってきたのか、そして、それが霧島国際音楽祭をどのように特徴づけたのかを考察したい。

本稿の構成は以下のとおりである。「1. はじめに」では本稿の研究目的を明らかにした。「2. 先行研究・資料」では音楽祭を扱った日本語研究の整理を行い、資料を紹介した。「3. 霧島国際音楽祭の創設」では、有志達による設立までの経緯及び設立後の運営とその対策について地域住民の動向・自治体の役割・企業の役割に注目して考察した。「4. まとめ」では、40年継続した経緯と霧島国際音楽祭の特徴に

キーワード：音楽祭、オーセンティシティ、地域、発展、鹿児島

* 本学経済学部講師

ついて明らかにした。末筆であるが、本稿作成のため、霧島国際音楽祭の関係者の方々に大変お世話になった。よって、「5. 謝辞」とした。

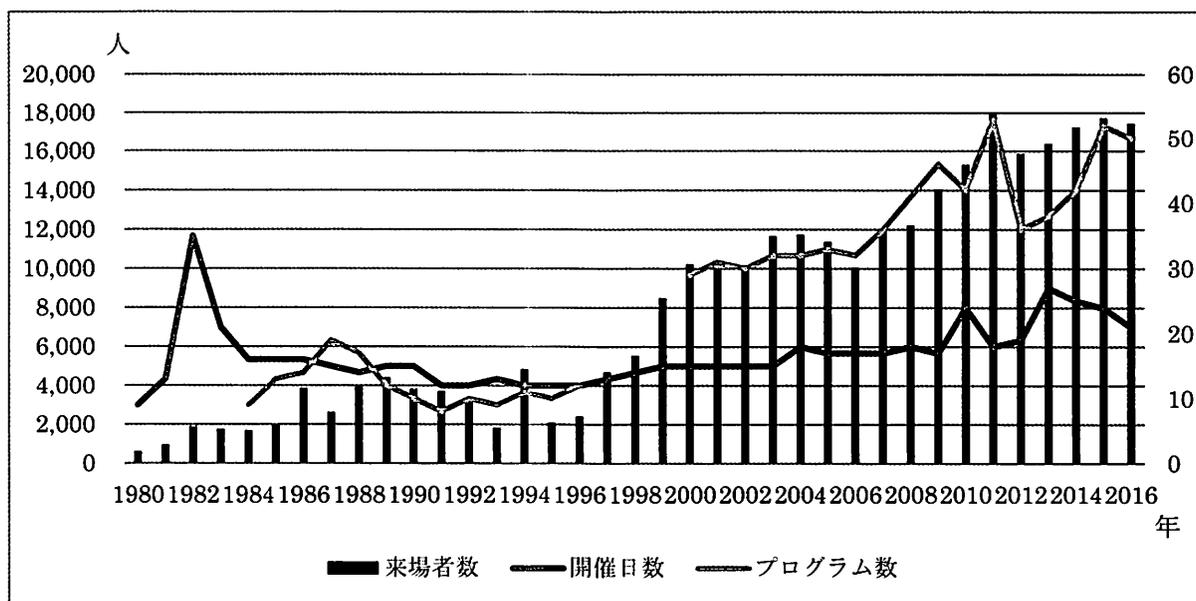


図1 霧島国際音楽祭の来場者数・開催日数・プログラム数の変化(1980-2016年)

出典：来場者数「きりとも 30年のあゆみ」45頁。

開催日数・プログラム数：チラシ・パンフレットより筆者作成。

2. 先行研究・資料

当音楽祭の発展過程についての研究は筆者の調べた限り、存在しないものの、「音楽祭」に注目した先行研究は多く存在する。その中で、当音楽祭の概要や簡単な成立史はすでに明らかにされている。

当音楽祭を研究対象とするにあたり、最も重要な研究は熊田知晃(2018)「文化行政の専門性に関する研究—霧島国際音楽祭を事例に—」¹⁾である。ここでは、文化行政の機能強化を考察する事例として当音楽祭が用いられた。これにより、当音楽祭の運営状況等が明らかにされており、本稿にとって重要な先行研究である。

「音楽祭」を論文のタイトルに冠した先行研究は、政策的見地もしくは経営(マネジメント)的見地からの論文が多い。もちろんこれらだけでなく、研究の焦点が文化活動になることから、社会学、教育学など学際的に研究されてきた。「文化」というものが観光のコンテンツを含め、今後の日本の経済成長において大きな役割を持つと同時に、地域・地方の活性化や安定化、コミュニティの形成や将来に深く関わるため、多くの分野で研究が進められている。

新藤(2004)²⁾、伊志嶺(2006)³⁾の先行研究整理にある通り、1980年代は文化をいかした地域活性化や文化産業が注目された。この年代は「地方の時代」、「文化の時代」、そして「行政の文化化」の時代であった。1990年代以降は「アーツ・マネジメント」すなわち経営学や文化経済学といった視点からの研究が始められた。そして2001年に文化芸術振興基本法制定以降、法律や政策の実施とその評価のため、音楽祭研究が

1 熊田知晃(2018)「文化行政の専門性に関する研究—霧島国際音楽祭を事例に—」『政治経済学研究論集』第3巻、57-74頁。

2 新藤浩伸(2004)「住民ボランティアによる地域音楽祭の創造」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第43巻、343-353頁。

3 伊志嶺絵里子(2006)「日本の音楽祭の活動状況とマネジメントに関する一考察—市民参加、協同のあり方について—」『文化経済学』第5巻第1号、83-93頁。

増加した（新藤，2004，344）（伊志嶺，2006，84）。

この整理にある通り，大木（2018）⁴大木（2017）⁵や大木（2015）⁶は，音楽祭をマネジメントの観点からとらえ，顧客の開拓，音楽産業を含め，音楽祭をいかにマネジメントすべきかについて事例を示しながら論じた。伊志嶺（2006）は官民連携のマネジメントに市民参加のあり方を含めることで，日本の音楽祭が抱える運営の課題を明らかにした。井関（2000）⁷は，文化政策についての先見的な事例研究である。

新藤（2004）は，「地域文化の創造」とボランティア参加を考察対象とした。事例研究として木曾音楽祭を取り上げ，地域文化運動と社会教育の関わりを明らかにした。

多くの研究では個別音楽祭の成立過程の概要が紹介された。これに対し，日本の音楽祭全体の歴史的な発展に注目した研究が山本（2003）⁸である。この研究では，1957年に日本で初めて始まった大阪国際フェスティバルなど日本における主要音楽祭の開始時の状況が紹介された。それだけでなく，音楽祭の基本的な分類方法を示したうえで，日本における音楽祭というものの受容過程を明らかにした。

また土崎（2005）⁹では，「あきたロシア音楽祭」を事例に，成立過程や音楽祭のあり方，そして地方からの文化発信の方向性が示された。古賀（2013）¹⁰は特に，音楽祭の文化的・社会的・経済的価値という視点から考察を進め，地域における音楽祭の意義を「ながさき音楽祭」を事例に検討した。

日本国内だけでなく，海外の音楽祭に注目した研究もみられる。大木（2015）以外には，八塩（2018）¹¹がフランスと日本の音楽祭を比較し，その違いを明らかにした。

宮本（2011）¹²は特に日本におけるクラシック音楽という「西洋」文化のオーセンティシティ，つまり「本物らしさ・正統性」の獲得と音楽祭の関連を考察した。日本の音楽祭はオーセンティシティ獲得過程の中で，コンサート型から地域参加型へとシフトしてきた。コンサートにおけるオーセンティシティは演奏スタイルによって認知される。オーセンティシティを獲得し，さらに音楽祭を存続するには，演奏家だけでなく，それを支える地域参加の要素が不可欠であった。「場所すなわち，地域と地域住民の経験がオーセンティシティを生み出したが，アマチュアだけではいかなる音楽祭も持続できなかつた」（宮本，2011，385-388）という発見は注目に値する。

このように，先行研究では当音楽祭を直接的に取り上げなくとも，「音楽祭」を学術的にとらえるための枠組みが提示されてきた。本稿では，霧島国際音楽祭の分析を進める準備作業として，霧島国際音楽祭の設立と発展について明らかにしたい。

資料として鹿児島国際音楽祭鹿児島友の会が2017年6月に発行した『霧島国際音楽祭鹿児島友の会 創立30周年記念誌 きりとも30年のあゆみ』（以下、『きりとも 30年のあゆみ』），2018年6月に発行した『霧島国際音楽祭 鹿児島友の会ニュース2018 きりとも vol.31』（以下，『きりとも vol.31』）を使用した。また鹿児島県・財団法人ジェスク音楽文化振興会・財団法人鹿児島県文化振興財団が2000年3月に発行し

4 大木裕子（2018）「高齢者と文化消費—国際音楽祭を中心として—」『ライフデザイン学紀要』第13巻，77-92頁。

5 大木裕子（2017）「BBC Promsの顧客育成と音楽ビジネスへの影響に関する一考察」『ライフデザイン学研究』第12号，105-119頁。

6 大木裕子（2015）「バイロイト音楽祭の伝統と革新のマネジメント」『京都マネジメント・レビュー』第27巻，1-16頁。

7 井関隆（2000）「自治体の文化政策研究 行政・市民パートナーシップ時代のフェスティバル：別府アルゲリッチ音楽祭の運営を中心に」『文化科学研究』第11巻第2号，31-41頁。

8 山本美紀（2003）「戦後の日本における国際音楽祭の受容に関する一考察」『文化経済学』第3巻第3号，65-75頁。

9 土崎宏人（2005）「地方からの文化発信の試み～「あきたロシア音楽祭」の創設～」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第27号，113-119頁。

10 古賀弥生（2013）「音楽祭を通じた芸術文化振興と地域振興～「ながさき音楽祭」の成果と課題を考える～」『活水論文集 現代日本文化学科編』第56巻，19-34頁。

11 八塩圭子（2018）「文化イベントの顧客満足度とロイヤルティ形成についての研究：「ラ・フォル・ジュルネ」日仏比較と顧客満足モデルの提示」『現代経営経済研究』第5巻第1号，51-72頁。

12 宮本直美（2011）「日本における音楽祭の変遷とオーセンティシティ」『社会学評論』第62巻第3号，375-391頁。

た『霧島国際音楽祭・講習会 20周年記念誌』を使用した。その他『第39回 霧島国際音楽祭 2018』プログラム及び霧島国際音楽祭公式ホームページ¹³を使用した。また、当音楽祭の企画を主に担当しているジェスク音楽文化振興財団が公式ホームページ¹⁴で公開している会計情報を利用した。ヒアリング調査では霧島国際音楽祭鹿児島友の会会長古木圭介氏、旅行人山荘会長蔵前壮一氏、鹿児島県職員の方々にご協力いただいた。また、蔵前氏から牧園町むらおこし塾『霧島国際音楽ホールへの夢』という非常に貴重な資料をご提供いただいた。

3. 霧島国際音楽祭の創設

【 設立の経緯 】

霧島国際音楽祭は1980年に第1回を迎えた。創設者は、ゲルハルト・ボッセ氏、野村三郎氏、高山義則氏、能勢見氏、橋口純氏、梁井洋之助氏、そして古木圭介氏である。

創設に尽力された野村氏は鹿児島市の鶴丸高等学校出身で、当時鹿児島短期大学（現鹿児島国際大学）教授であった。「郷土鹿児島の文化に寄与したい」との志を持ち、特にクラシック音楽活動の推進に尽力した。1971年の鹿児島オペラ協会、鹿児島交響楽団の発足にも野村氏は関与していた¹⁵。「東京中心だけでなく各地域固有の音楽文化が根づかないうちは日本の音楽は本物ではない」という持論を持ち、これに取り組んだのである¹⁶。

霧島国際音楽祭の創設の直接のきっかけとなったのは、ボッセ氏からの野村氏への講習会の提案と古木氏から野村氏への提案であった。

ボッセ氏は「志があっても財政的理由等で留学できない音楽学生のために、海外から優れた講師を招いて実技指導と演奏会を開き、同時に人的交流を深める」ことを目的に、夏の霧島高原での“音楽祭・講習会”の開催を提案（『霧島国際音楽祭 20周年記念誌』5頁より引用）した。

野村氏とボッセ氏の出会いは1969年にさかのぼる。この年に熊本でライプツィヒ・ゲヴァントハウス弦楽四重奏団演奏会が開かれ、そこで両人は初めて出会った。その後、1975年11月にゲヴァントハウス管弦楽団演奏会が鹿児島文化センターで開かれた。その後、ボッセ氏と野村氏の双方の意思が重なり合い、1976年にボッセ夫妻が来鹿し、鹿児島短期大学などで講習会を開催し、鶴丸高校などで演奏会を開いた。霧島を案内した時に、霧島での講習会がボッセ氏から提案された¹⁷。この時に野村氏の旧友である高山氏はボッセ夫妻に空き家を一カ月無償で提供し¹⁸、親交を深めた。

1978年、野村氏、高山氏、橋口氏、古木氏らは、グローバル・ユース・ビューロー主催の「ヨーロッパ音楽の旅」に出発した。オーストリアからイタリアまで2週間にわたる音楽鑑賞ツアーであった。

特に、ザルツブルク音楽祭は霧島国際音楽祭開催のための大きな刺激になった。古木氏は当時を以下のように振り返っている。「この地〔ザルツブルク〕では、こんな楽しい催しものが1ヶ月も続くのである。ホテルは1年前から予約で満室である。街の土産物屋やレストランは観光客で溢れている。文化が大きな観光資源となっている顕著な例といえる。そこで、同行の野村三郎教授（当時鹿児島短期大学）に『鹿児島でもこんな音楽会ができませんか』と提案してみた。先生は即座に『やりましょう！』と応えて同行の

13 霧島国際音楽祭ホームページ <http://www.kirishima-imf.jp> (2019年1月31日最終アクセス)

14 ジェスク音楽文化振興会ホームページ <http://www.jesc-music.org> (2019年1月31日最終アクセス)

15 『きりとも 30年のあゆみ』24頁。

16 栗田晃穂(1986)「特別記事 夏の音楽祭にみる新しい傾向—霧島国際音楽祭と草津アカデミーから」『音楽芸術』1986年10月号、82-85頁。

17 『きりとも 30年のあゆみ』12頁、32頁。

18 『きりとも 30年のあゆみ』27頁。

音楽愛好の士に持ちかけた」(『きりとも 30年のあゆみ』32頁より引用)。つまり、古木氏から野村氏へ鹿児島での音楽祭開催を提案し、これに野村氏が応えて、1980年に第1回が開催の準備が始まったということである。

その後、音楽祭資金のために野村氏、高山氏、能勢氏、橋口氏の4名は毎月1万円ずつを積み立てた¹⁹。1ヶ月4万円なので、1年で48万円となる。1978年9月以降、1980年8月の開催までに、96万円ほど積み立てられたと考えられる。

『きりとも 30年のあゆみ』32頁によると、1979年には野村氏、橋口氏、高山氏、能勢氏、梁井氏に加え、鹿児島信用金庫理事長の永田致直氏、鹿児島県文化センター館長の四蔵典夫氏、そして古木氏、8人が音楽祭開催に向けた準備委員会を立ち上げた。それは「鹿児島室内合奏協会」と名付けられ、協会長には永田氏が就任した。

1980年に古木圭介氏の父親、古木俊雄氏の経営する霧島高原ユースホテルにて第1回「霧島国際音楽祭・講習会」が開かれた。ボッセ氏だけでなく、ウィーンフィルのチェロ奏者のスコッチ氏が講師を務め、企画・運営は野村氏が行った²⁰。野村氏は受講生集めにも奔走した。講習会には全国から100人あまりの受講生が集まり、4回のコンサートが開かれた。第1回当時の会計報告等は未発見であるが、1985年に鹿児島県に600万円の助成を申請し、1986年に50万円の助成金を得ている。1986年にこの音楽祭の経費は2,000万円、そのうち県からの助成金が50万円、牧園町から50万円、霧島町から20万円、その他寄付金が寄せられた。しかし、年間700万円の赤字が出た(栗田、1986、82-85)。

第1回終了後、数百万円の赤字が残った。そして、野村氏以外は全員鹿児島室内合奏協会を脱退し、第2回目以降は野村氏のみで運営を行った²¹。その後も赤字が続いたため、野村氏は私財を投じて存続に努めた²²。企画・運営を個人で行うことに限界を感じた野村氏は、1984年当音楽祭運営のため、ジャパン・アーツ社長の中藤康雄氏と財団法人ジェスク音楽文化振興会を創設した。

このようにして、1985年第6回以降、本音楽祭の主催はジェスク音楽文化振興会となった。ちなみに、それまでの主催は第1、2回は「鹿児島室内合奏協会」と霧島町、第3回は鹿児島室内合奏協会(室内楽部門)と財団法人国際舞台芸術振興財団(オペラ部門)、第4回は霧島国際音楽祭実行委員会、第5回は音楽文化振興会・霧島国際音楽祭実行委員会である。

霧島国際音楽祭は第2回から主会場が牧園町のキャッスルホテルになり、霧島町と牧園町で開かれるようになった。そのきっかけは「牧園友の会」の初代会長である池田正晴氏の提案であった。池田氏は第1回霧島国際音楽祭を聞きに行き、霧島町だけでなく牧園町でも開催し、「霧島地域全体の音楽祭にすべきだと思った」(『きりとも 30年のあゆみ』32頁より引用)。これを当時の今別府町長に相談したところ、すぐに霧島キャッスルホテルに電話し、第2回目から当ホテルが講師や受講生の宿泊所となり、ロビーコンサートも行われるようになったという。ちなみに、現在、霧島町と牧園町は合併し、霧島市になっている。霧島町は霧島神宮、牧園町は霧島温泉郷、新川渓谷温泉郷、和気神社を有する。牧園町の方がホテルや旅館が多いという特徴がある。

以上のように、野村氏の鹿児島の文化レベル向上への思い、ボッセ氏の音楽教育への思い、そして古木氏の鹿児島の経済を支える観光コンテンツとしての着眼、そしてそれらを支える愛好家たちによって、霧島国際音楽祭は誕生したのである。

19 『きりとも 30年のあゆみ』25頁。

20 『きりとも 30年のあゆみ』27頁。

21 『きりとも 30年のあゆみ』32頁。

22 『きりとも 30年のあゆみ』25頁。

【 地域住民の参加 ―友の会によるサポート― 】

ジェスク音楽文化振興会が主催を担うことにより、企画・運営が安定したわけではなかった。この振興会の本部は東京に置かれたが、しばらくすると、赤字の音楽祭をわざわざ霧島で行う必要性に疑問を持たれた。これに対し、霧島で音楽祭が開かれなくなることに危機感を抱いた牧園町では1986年第7回開催の直前に友の会が発足した。その際中心となったのは前述の池田氏であり、牧園友の会初代会長に就任した。同じ頃に発足した霧島友の会の初代会長は東芦谷政美氏であった。1987年には鹿児島友の会が発足し、会長は中村俊一氏が務め、事務局長には古木氏が就任した。鹿児島県も音楽祭に対して助成をするだけでなく、第8回より主催に加わった。

霧島・牧園友の会の役割は、地元と音楽祭を結びつけることである²³。実際には、演奏会の受付、ピアノ練習の場の提供、そして音楽祭開催期間中の食事やお菓子の提供、ビュッフェパーティーの開催を担当する。特に「食事によるもてなし」には力が入られた。演奏者に地元食材を使った手作りの料理を提供することは喜ばれ、本音楽祭の魅力の一つとなった。

食事作りに関しては、第1回の時からいわゆる「地域の人々」が関与した。『きりとも 30年のあゆみ』9頁の古木氏の言葉を引用すれば、「ユースホステルの食事というわけにはいかないのに、ドイツにいたことがあって料理上手な新納亮子さん（黎明館館長などを歴任した新納教義さんの娘さん）にお願いしてドイツ料理を作ってもらいました」という。また「自宅のピアノを提供したのは牧園友の会でした。」という。

その後、外国から来た一流のアーティストに対し、霧島の自然の中で自ら作った料理を提供する主に女性たちの音楽祭への参加スタイルは、そのまま音楽祭の名物として定着した²⁴。

鹿児島友の会も、オープニングコンサート後のビュッフェパーティーに助成金を出し、ブースを出店し、料理を提供している。その他、1987年以降第15回まで、鹿児島県文化センター（現宝山ホール）で霧島国際音楽祭の「前夜祭」を主催した。第20回以降、これはジェスク主催の「かがり火コンサート」に引き継がれた²⁵。1990年からは冬のイベントを主催している。また、ジェスク音楽文化振興会に対し、支援金を送っている。年によって、その額は異なるが、2010年以降は少ない年で20万円、多い年で50万円を送っている。1988年から2016年までの支援金総額は1,766万5,000円である。また、1996年から鹿児島市内10のライオンズクラブ元会長・幹事会の支援により、毎年1名か2名、霧島国際音楽祭・講習会に奨学生を送っている²⁶。

このように、霧島国際音楽祭に対して地域住民は有志を中心に積極的な関与を行っている。これは、オーセンシティブティを獲得するために必須の条件である。霧島では、地元のホテルのロビーでの演奏はもちろんであるが、地域住民が食事を通して音楽祭に積極的に関与した。これが音楽祭の一つの特徴を作り上げ、演奏家にとって大きな魅力となった。

鹿児島友の会も資金や奨学生を通じて独自の関わり方をしている。鹿児島友の会で注目すべきは、『きりとも 30年のあゆみ』を含めて、記録をとり、情報発信を行っている点である。これにより、霧島国際音楽祭についての共通認識と歴史を踏まえての存在意義、特徴の確認が可能となる。すなわち、当音楽祭のアイデンティティの醸成に対して、非常に大きな貢献がある。

【 行政（鹿児島県）の関わり―みやまコンセル建設を中心に― 】

講習会・演奏会はホテルのロビー等で実施され続けたが、1990年頃になるとホール建設の要望が出てき

23 『きりとも 30年のあゆみ』7頁。

24 『きりとも 30年のあゆみ』6頁。

25 『きりとも 30年のあゆみ』30頁。

26 『きりとも 30年のあゆみ』46頁。

た。図1で1994年に来場者数の増加が確認できる。この原因はみやまコンセールという音楽専用のコンサートホールが建設されたことである。

1994年にボッセ氏や地域住民、音楽祭関係者、念願のホールが建設された。みやまコンセールの建設は鹿児島県の進めた「霧島国際芸術の森構想」の中心事項であった。当初の見積り案では建設費6億円であったが、最終的には約30億円をかけて建設された²⁷。このような高額な予算を通したのは、当時の鹿児島県知事土屋佳照氏であり、その判断は英断であったと評される。費用が増加した理由の一つは高い音響効果を実現したことである。建設設計は横文彦氏、音響設計は当時神戸大学助教授の安藤四一氏であった。ホールは残響音1.6秒から1.8秒、「プレファレンス理論により各座席で最大効果になるように計算された世界で最初のホール」(『きりとも 30年のあゆみ』34頁より引用)である。

ホールの建設についていえば、1990年12月5日に鹿児島・霧島・牧園友の会会長が、鹿児島県庁を訪問し、知事及び関係者へ音楽ホール建設についての要望書を提出している。

平成3年から7年まで、鹿児島県庁建築家で県有施設の建築に携わった梶原知治氏の文章によると、みやまコンセールの特徴は以下のとおりである。「どの席にいても豊かな音色に包まれるような音響をめざし」て造られ、「ボッセ教授は、このホールを世界で最も優れた室内楽ホールであると太鼓判を押された」という(『きりとも vol.31』14-15頁より引用)。

広域にわたり巨額の建設費を必要とする霧島国際音楽祭の主会場となるホールの建設及び周辺環境の整備といった大規模な事業は自治体にしかできない事業であった。

この計画は行政側だけが関与したのではない。牧園町で開かれた「牧園町村おこし塾」で行われた音楽ホール建設についてのアンケート調査が、第1回開催から12年後に「霧島国際音楽ホールへの夢」という冊子にまとめられた²⁸。どのようなホールが良いのか、などの項目のほか、自由記述の項目も設けられたアンケートである。音楽ホール建設は友の会だけでは不可能であるが、世界から迎える音楽家の演奏を音楽ホールで聞くことは、住民の願いであった。

このホール建設に対する牧園友の会の活動を紹介したい。

霧島国際音楽祭は野村氏をはじめとする地元の有志とボッセ氏による、いわゆる草の根運動の延長線上に始まった音楽祭である。音楽祭開催の理由、いいかえると音楽祭の意義は、若手演奏家への教育及び演奏機会の提供であった。そして、演奏会を通じて、広く鹿児島の人々に一流のクラシック音楽鑑賞機会を提供することであった。

この開催意義が浸透していたことは、ジェスク音楽文化振興会が他の地での開催を考えた時、鹿児島の人々がそれを引き留めたことに表れる。また、音楽祭が牧園町の人々に受け入れられている様子が「霧島国際音楽ホールへの夢」のアンケート結果とペーパーフォーラムに表れている。

アンケートは125人程度に対してとられた。「今までコンサートに行ったことはありますか。」という問いに対しては、「はい」が107人(86%)、「いいえ」が17人(14%)であった。これに対し、「霧島国際音楽祭を聴きに行ったことがありますか。」という問いに対しては、「はい」が62人(51%)、「いいえ」が59人(49%)であった。地元の人々の約半数が距離的に近いにもかかわらず霧島国際音楽祭で鑑賞していない実態が浮かび上がった。一方で、コンサート自体には行ったことがある、という割合は86%と高く、潜在的な顧客は多いことがわかる。

ペーパーフォーラムの部分には8人の参加者の意見が載せられている。ここには、ホールの建設自体にはおおむね賛成意見であるが、霧島の自然環境を破壊するようなものであるなら反対という意見が見られ

27 ヒアリング調査による。

28 本冊子は友の会の記録用とみられ、発行年月日の記載はない。初ページに「今年も第12回霧島国際音楽祭が開催されました。」とある。

る。ペーパーフォーラムは以下の5つの質問に答える形で行われた。本稿では返答の一部を紹介する。「1、あなたが考える霧島に似合うホールのイメージはどんなものですか」という問いに対しては「「緑一杯の公園の中の小さなホール。」といった霧島高原の自然環境を生かしたいというものが多くみられる。「2、霧島のホールを利用するために、運営・施設面などに希望するものはありますか」という問いに対しては、「運営については、完全に「県」にゆだねるのではなく、地域や民間の音楽関係団体も参与すべき」という意見が確認される。「3、地元には何を期待しますか。たとえば、音楽ホールの似合うまち並みや環境はどうあったらよいと思いますか。」に対しては、「世界各地には、一年のうち一度だけのイベントの為に街づくりをしているところもたくさんありますが、霧島は一年を通して「音楽」という文化を育てる街づくりのできる地域だと思います。地方の中心都市から離れているからできることもあるのです。」という意見が寄せられた。「4、音楽を核とした地域の産業・文化・経済に期待することはありますか」という問いに対しては、「ホールが出来たからといって、ホテルでの開催を全部とりやめるのはやめてほしい。身近な所でのコンサートだから参加したい面もあるのでその点を考慮してください。」最後に「5、その他」のところには、さまざまな思いが書かれている。「産業があって、文化が自然発生するのではなく、文化が産業・経済を根付かせている地域が日本にもあっていいと思います。」という全体的なことから、音楽祭のプログラムやテーマ案を具体的に述べたものもある。

このような要望・ホール建設に対する明確なビジョンが友の会の中で共有されていたことは、オーセンシティを考えるうえで重要であろう。

ここでは、オーセンシティの定義を議論することはしないが、霧島国際音楽祭が40年も存続した理由を最後に考察したい。山本(2003)に指摘される通り、「なぜそこで開催されなくてはならないのか」という必然性についての考察である。日本の音楽祭は、音楽ホールのこけら落とし公演として始まった事例が多い。1958年から始まった日本で最初の大阪国際フェスティバルもフェスティバル・ホールのお披露目式のためのイベントだった。

霧島国際音楽祭がこのような日本の他の音楽祭と大きく異なる点は、鹿児島県の地元の有志が始め、その後も地元の人々によって引き継がれ、そしてホール建設の声が上がり、実現されたことである。

またここで指摘しておきたいのは、鹿児島県友の会と霧島友の会の役割の違いである。

鹿児島県友の会も霧島友の会も鹿児島県下という分類では「地元」である。しかし、みやまコンセールを有する霧島友の会の音楽祭への関わり方は、鹿児島県友の会より演奏家に近い。前述の食事の提供のほかに、霧島国際音楽祭が地元で根付いた事例の一つを紹介する。

それは旅行人山荘でのクラシックコンサートである。旅行人山荘は2017年に創業100年を迎えた温泉宿である。正面玄関から入ってすぐのギャラリーにはグランドピアノが設置されている。霧島国際音楽祭に刺激を受けて設置された。音楽祭期間中は練習用ピアノとして提供される。それ以外の期間も不定期であるが、月に4回ほどのコンサートが開催されるようになった。まさに、地元で音楽文化が根付いた一つの例である。

これに対し、鹿児島県友の会は演奏家との距離は比較すれば遠いが、送客という点での貢献は非常に高い。正確なデータは未入手であるが、人口で見ると鹿児島県1,612,481人中、鹿児島市597,215人、霧島市124,719人²⁹であることから、鹿児島市からの参加者は多いと推測される。

行政が金銭的に支援を行い、地元の人々が文化を吸収し、それを発信する。このサイクルにより、『音楽の友』2017年11月号に評されたような「いちど訪れると、また来たくなる人間的魅力にあふれた音楽祭」の魅力の存続が可能であったことが、確認された。

29 鹿児島県ホームページ、月報(毎月推計人口) <https://www.pref.kagoshima.jp/ac09/tokei/bunya/jinko/jinkoudoutyousa/geppou.html> (2019年1月31日最終アクセス)

【 企業の役割—ジェスク音楽文化振興会 】

友の会設立に先立って設立されたジェスク音楽文化振興会であるが、その活動は2019年1月31日現在、公式ホームページ（以下、ジェスク公式HP）から知ることができる。今回はジェスクへのヒアリング調査等かなわなかったため、このホームページ掲載情報を資料としたい。

当財団概要は、ジェスク公式HPによると「公益財団法人ジェスク音楽文化振興会は、音楽祭・音楽会・講習会の開催を行うと共に邦人など音楽家の活動を助成し、併せて音楽に関する国際交流を図り、もってわが国の音楽文化、舞台芸術の発展に寄与することを目的として、1984年（昭和59年）に設立。2011年（平成23年）に内閣府所轄の公益財団法人として認可され」と紹介されている。「名称のジェスク（JESC）は、JAPAN-EXCHANGE-SEMINARS-CONCERTSを意味し、講習や演奏会を開催することによって、音楽文化の交流・振興に奉仕する姿勢をあらわす」（ジェスク公式HPより引用）ということである。

そもそも霧島国際音楽祭のために設立された企業であるため、役員・評議会には当音楽祭関係者の名前あり、連続性が確認できる。例えば、評議員には、株式会社南日本放送代表取締役会長中村耕治氏、専務理事には公益社団法人鹿児島県観光連盟観光プロデューサー古木圭介氏、霧島国際音楽祭音楽監督でありチェリスト、サントリーホール館長である堤剛氏、特別顧問には株式会社鹿児島銀行相談役大野芳雄氏、前霧島市長前田終止氏の名前を確認できる。

ジェスクには4人のアーティストが所属している。ヴァイオリニストの四方恭子氏、ヴァイオリニストのザハール・ブロン氏、チェリストの田中雅弘氏、ピアニストの青柳晋氏である。田中氏は現在、霧島国際音楽祭・企画委員を務めている。

ジェスクは「日本でも最大手の音楽事務所である株式会社ジャパン・アーツが後援となり設立され、資金面だけでなく、株式会社ジャパン・アーツが有する専門性によって制作面でも重要な専門的人材となった。」と熊田（2018）は指摘する。すなわち、企画はジェスクが担い、鹿児島県や霧島市は運営や金銭的支援を行い、友の会が演奏家のサポートを行うという体制は、ジェスク設立当初からの霧島国際音楽祭の特徴であった。

ジェスクはその専門性から企画を担当する。アーティストと連絡を取り、プログラムを作成するわけだが、アーティストの要望に応えるようなプログラム作りを心掛けている³⁰。

鹿児島県は年間3,000万円以上、霧島市は700万円の金銭的援助を行っている。表1の平成30年度（2019年度）ジェスクの会計記録によると、経常収益のうち補助金と助成金収入が全体の48%をしめ、そのうちの71%は鹿児島県と霧島市が負担している。ちなみに、経常収益の約34.5%を両自治体が負担しているともいえる。（表1、図2参照。）

第16回から財団法人鹿児島県文化振興財団が主催へ加わった。鹿児島県が確保した財源はこの財団へ入る。この財団からジェスクに企画が委託される。この財団の霧島国際音楽祭における主な役割は運営すなわち「裏方」である。「関係機関との連絡・調整、広報、チケット販売、公演準備、場内整理、統計、アンケート集計、楽器等の調達等々」（『きりおん vol.31』12より引用）を担当する。

このような役割分担により霧島国際音楽祭は運営されている。

30 関係者へのヒアリング調査より。

【 運営図 】

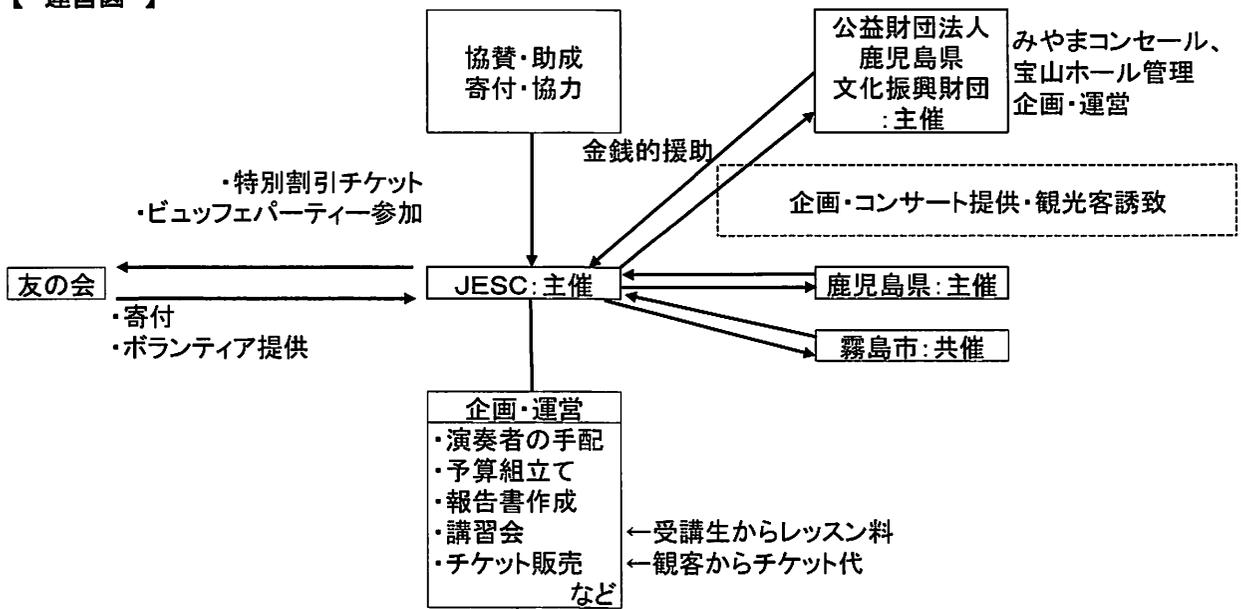


図2 霧島国際音楽祭運営図 (筆者作成)

表1 平成30年度霧島国際音楽祭事業経常収益額

科目	音楽祭事業
一般正味財産増減の部	
経常増減の部	
経常収益	
事業収益	
公演事業収入	8,559,500
受講料収入	15,330,000
演奏会収入	19,950,000
寄付金収入	10,880,000
補助金収入	48,410,000
助成金収入	3,500,000
聴講料収入	150,000
楽譜売上	0
雑収入	500,000
基本財産利息収入	18,651
受取利息	0
経常収支計	107,298,151

出典：公益財団法人ジェスク音楽文化振興会
ホームページ 収支予算書（正味財産増減
ベース）自：平成29年度4月1日 至：平成
30年3月31日 より筆者作成。

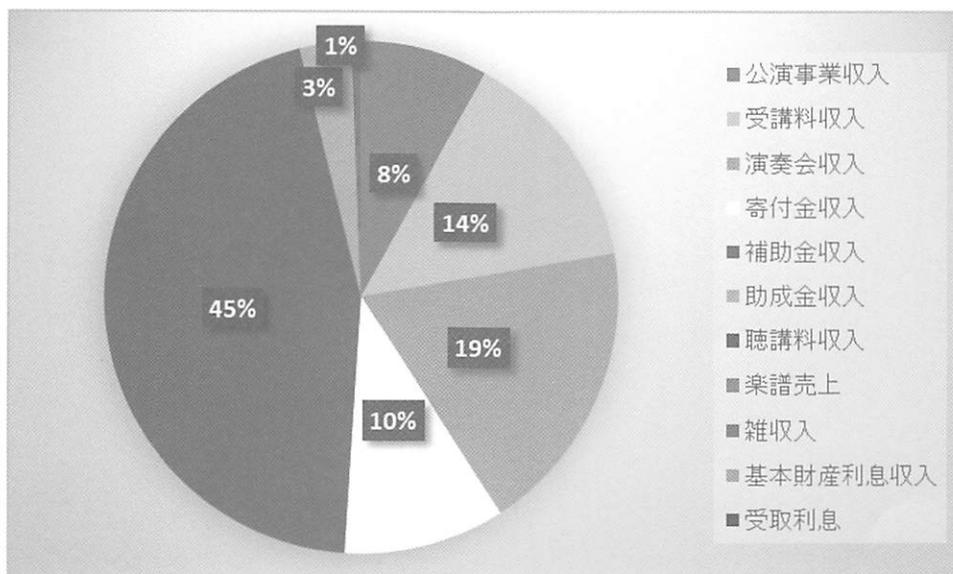


図3 平成30年度霧島国際音楽祭音楽祭事業経常収益割合

出典：公益財団法人ジェスク音楽文化振興会 収支予算書（正味財産増減ベース）自：平成29年度4月1日 至：平成30年3月31日 より筆者作成。

4. まとめ

以上のように、霧島国際音楽祭は地元のクラシック音楽愛好家が発起人となり始められ、現在では「老舗」とよばれ、アジアを代表する音楽祭へと成長した。鹿児島県の文化レベルの上昇、日本人音楽家の演奏レベルの向上、そして観光コンテンツとしての期待が、現在の霧島国際音楽祭へと受け継がれながら、発展を遂げた。この点は、草津のように、音楽祭というコンテンツを誘致して始められた音楽祭や音楽ホールのこけら落とし公演として始められた音楽祭と決定的に異なる³¹。

当音楽祭はその時々の問題への対応策をとる過程で、地域住民と自治体、そして企業による役割分担と協力体制が築かれた。当初の金銭的また企画・運営面の問題解決のために、ジェスク音楽文化振興財団が組織された。そして、地元での存続が望まれる中、それを達成するために、県が金銭的援助をし、主催に加わった。音楽祭を続けるにつれ、より良い演奏環境が望まれ、みやまコンセルが建設された。その際に、地元牧園町の人々がこの建設に対し、積極的に議論していたことは、音楽祭のオーセンティシティ獲得を象徴する出来事である。その後、財団法人鹿児島県文化振興財団が主催に加わり、裏方的運営を担うようになり、現在のような運営体制が構築されたのである。

5. 謝辞

本稿は、鹿児島国際大学附置地域総合研究所協同研究プロジェクトにおける研究成果の一部である。研究を行うにあたり、鹿児島県職員の方、霧島国際音楽祭関係者の方々、そして特に古木圭介会長と蔵前壮一会長には、お忙しい中、大変丁寧に調査にご協力いただいた。ここに感謝の意を示したい。心より御礼申し上げる次第である。

今後も当音楽祭についての研究は続ける予定であるが、本研究が「霧島国際音楽祭」の発展に少しでも寄与できることを切に願っている。

31 これらの比較については、別稿にまとめた。